

# 福岡県古賀市米多比・薦野地区の 未知の中世城郭・仮称「上米多比城」

伊藤 慎二

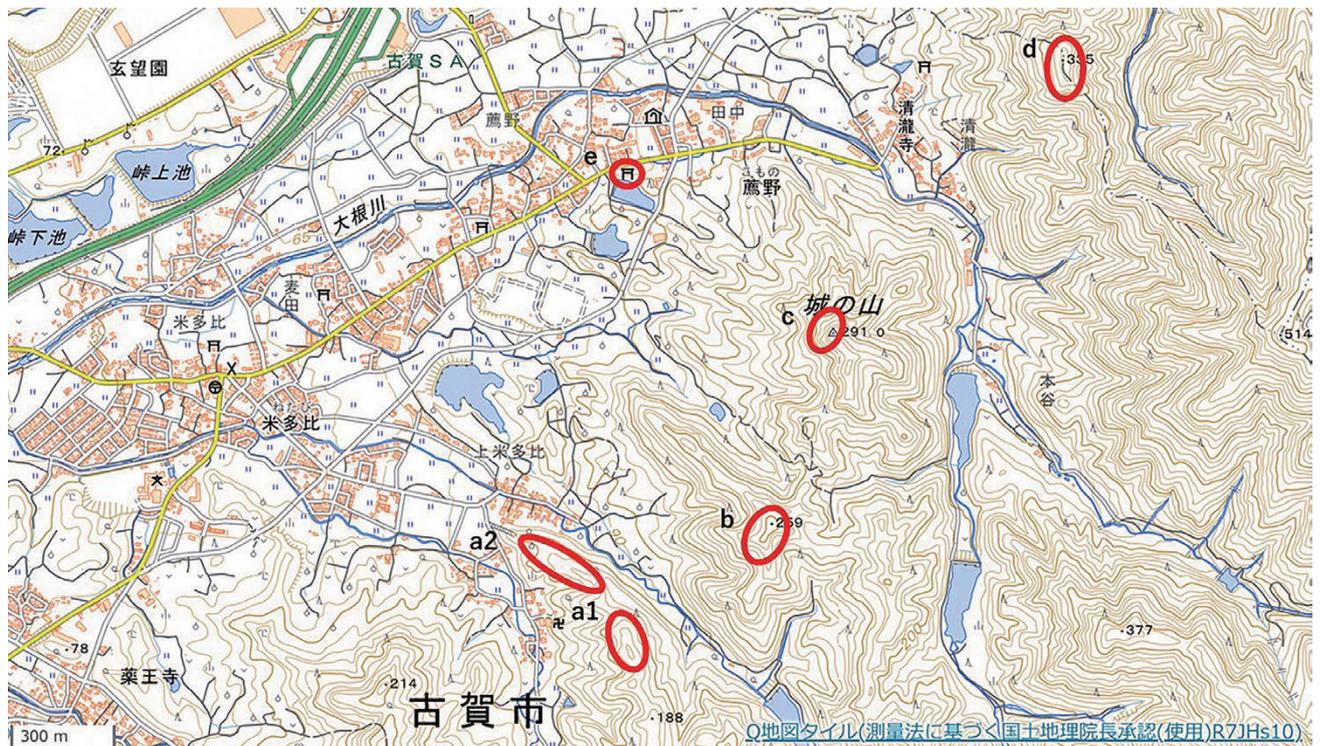
## はじめに

福岡県古賀市東部の米多比・薦野地区には、南北2 km・東西1.5 km 程度の狭い範囲内に、米多比城(里城部・山城部)・白ヶ岳城・小松岡砦・鶴岳城といった中世城郭遺跡が集中することで知られる(第1図)。最近公表された精細に微地形を判別できる赤色立体地図(全国Q地図 MPI 赤色立体地図)(註1)を基に、この地域のそれらの城郭遺構を参照する過程で、これまで知られていない城郭遺構と考えられる地形を2025年8月に識別した。そこで、草木の冬枯れ時季を待って、2025年12月に現地踏査を行った。その結果、仮称「上米多比城」と名づけら

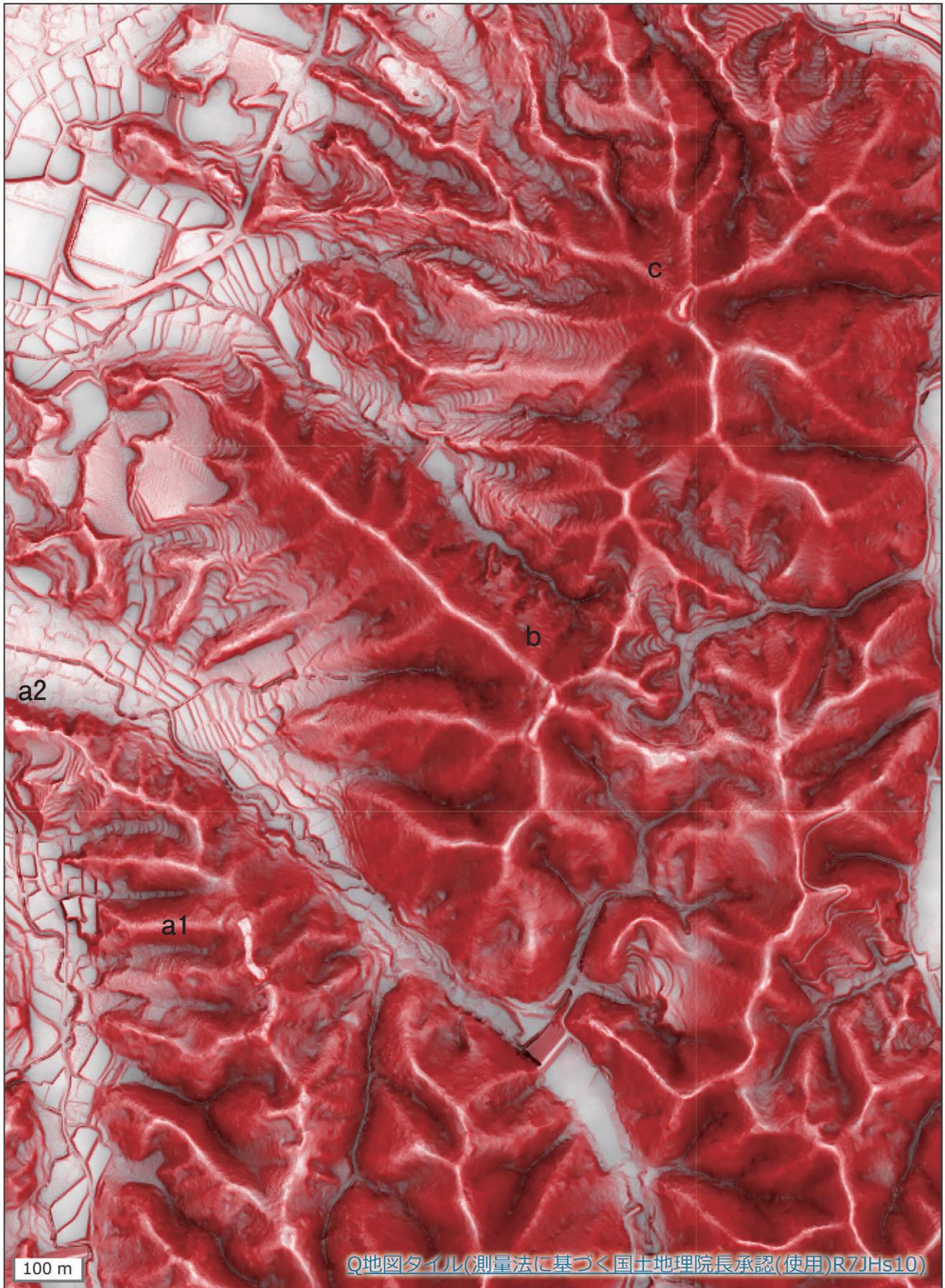
れるこれまで未知であった中世城郭遺構を確認できた。そこで、本稿では、その「上米多比城」の遺構の現状と特徴について報告し、その性格に関して若干の考察を行う。

## 1. 米多比・薦野地区の中世城郭(第1・2図)

古賀市東部は、犬鳴山系を背後に控える標高200~300 mほどの山並みがおおよそ南北方向に連なる。それらの山頂に南から北に向かって、米多比城・白ヶ岳城・鶴岳城があり、白ヶ岳城の西麓には小松岡砦がある。『筑前国続風土記』などで、白ヶ岳城・小松岡砦・鶴岳城に関する伝承記述のみが知られて



第1図 「上米多比城」と周辺の中世城郭 a1: 米多比城山城部・a2: 同里城部、b: 「上米多比城」、c: 白ヶ岳城、d: 鶴岳城、e: 小松岡砦  
※Q地図・国土地理院地図を基に、城郭位置・記号を筆者加筆



第2図 赤色立体地図上の「上米多比城」と周辺の中世城郭 a1：米多比城山城部・a2：同里城部、b：「上米多比城」、c：白ヶ岳城  
 ※Q地図・国土地理院地図を基に、城郭位置記号を筆者加筆

いたが、中西義昌・岡寺良による現地調査（木島・中西 1998、中西 1999、中西・岡寺 2001、岡寺編 2001、中村・村上編 2009、岡寺編 2015）により、史料に登場しない米多比城の発見と、各城の現存遺構と縄張り特徴などの詳細が明らかにされた。全体的な特徴としては、おおむね単郭構成で、顕著な防御施設としては堀切がすべてに共通する。

それらのなかでも、米多比城と鶴岳城はやや規模が大きく、主郭部分の最大長が100mほどで、曲輪上の外縁部に低い土塁がほぼ全周する状況や堅堀群（畝状空堀）が特徴的である（註2）。鶴岳城の主郭については、当初階段状に三段の削平地が連なる構造であったのが、最終的に戦国末期（天正中後期頃・1581～1587年頃）にそれらの削平地全体の外縁部を結ぶように土塁をめぐらせて現在の単一主郭に改修された変遷過程が推測されている（中西1999）。また、米多比城は、山頂部の山城部に対して、直下の山麓部に里城部が伴うことも明らかにされている。白ヶ岳城と小松岡砦についても、やや距離が離れているが、同様の関係が想定されている。これらの城郭は、この地域の古くからの在地勢力で、ともに豊後の大友氏の配下で立花山城（福岡市東区・新宮町）にも深く関わった薦野氏と、薦野氏から分岐し協力関係にあった米多比<sup>おたみ</sup>氏に関連する戦国期城郭と解釈されている（註3）。

## 2. 「上米多比城」の概要（第3・4・5図）

### （1）地理的特徴

おおそ南東から北西方向に流れる米多比川ををささんで南北に広がる上米多比地区は、その上流に向かって進むと谷間最奥の上米多比公民館を中心とする集落に到達する。その付近の集落や米多比川から見れば東側真上の尾根頂上付近に、今回新たに確認した中世城郭遺構が存在する。しかし、周辺の複数の旧家で聞き取り調査を行ったかぎりでは、上米多比地区に属するこの山の名称や伝承を確認することができなかった（註4）。古賀市都市計画総括図（註5）記載の小字名は、第4図b中央左側の谷が

「大谷」、中央右側の谷が「地藏谷」、そして右端の米多比川に向かって降る山の中腹が「八軒堂」となっているが、山頂部周辺の小字名は確認できなかった。そこで、今回発見した中世城郭遺構を、仮称「上米多比城」とする。

「上米多比城」が存在する尾根の主軸は、おおむね南北方向に米多比地区から薦野地区に向かって延びる。同一の尾根続きの北端に白ヶ岳城（城ノ山・薦野城：標高291m）があり、その中間を「出逢ノ辻」の峠道が東西方向に横断している。そして、その「出逢ノ辻」峠からさらに南側に向かって延びる尾根の最高所（標高259m）を中心に「上米多比城」が位置する。この「上米多比城」の尾根は米多比川に向かって南西方向に降り、川をはさんだ対岸の山頂・山麓の米多比城（山城部の標高187m）と向き合う（第4図a）。

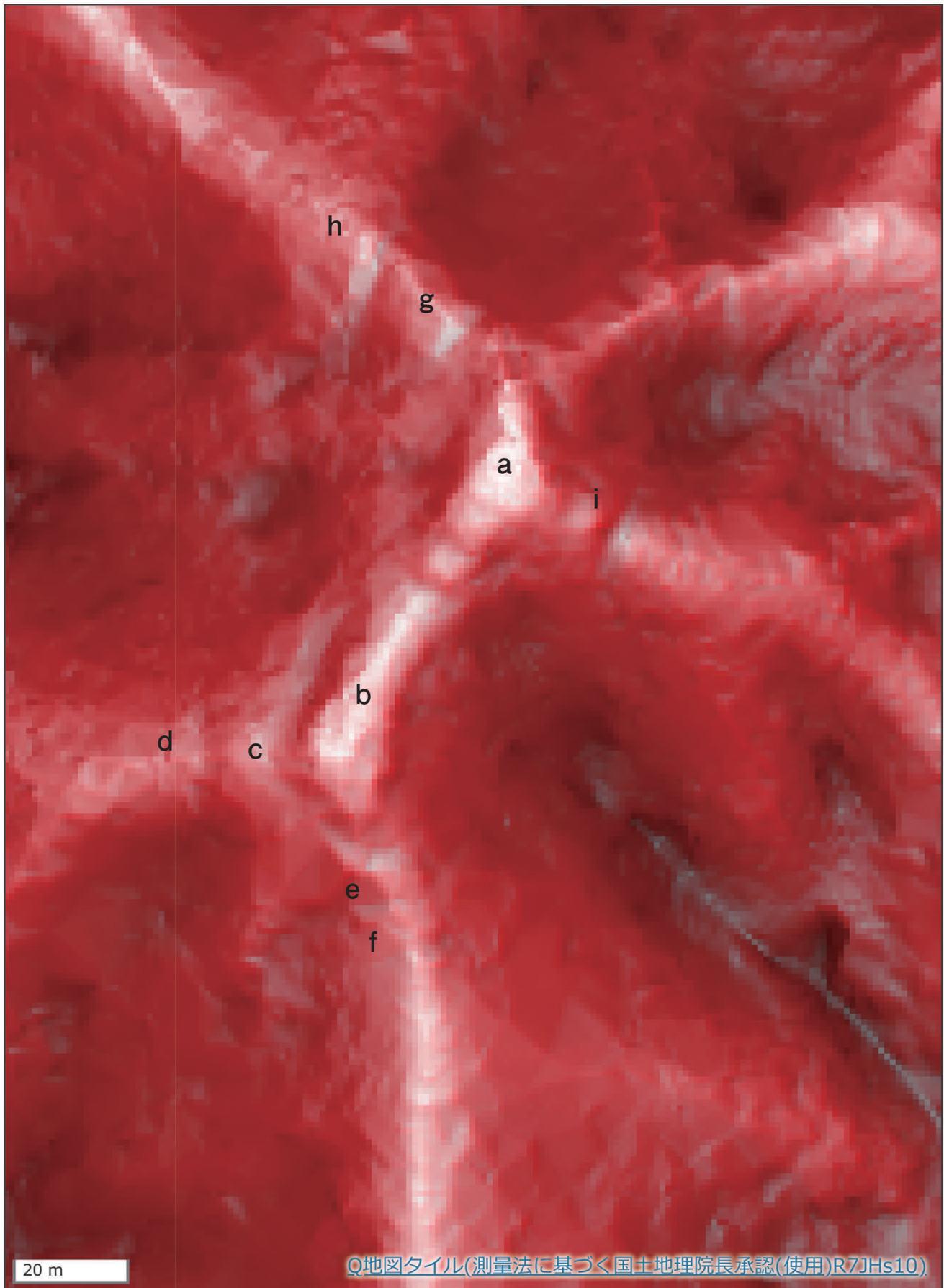
現地の現状は、おそらく戦後に植林され現在も手入れが続いている樹齢の若い杉林である。また、周辺の尾根から続く散策路脇道の目印として、尾根分岐点などの樹木に目印のテープが巻かれている。

### （2）遺構の特徴

最高所の尾根頂部に南北方向に連なる二つの主要な曲輪と、その周囲に接続する四方向の尾根に設けられた堀切がおもな遺構である（第3・5図）。城域は、南北方向に約130m、東西方向に約80mである。

北側の城内最高所（標高259m）に、平面不整形の主郭曲輪1（第3図a、第4図c）がある。曲輪上の削平度合いは不十分で、周縁側にむかってやや傾斜している。曲輪1の南側には低くゆるやかな二段の段差または切岸（第4図d・e）を設けて、下位の曲輪2との間を画する。平面長方形の曲輪2（第3図b、第4図d・f）は、城内でもっとも面積の広い曲輪である。曲輪2の西南直下には、幅の狭い西南腰郭（第3図c、第4図g・h）が付属するが、全体として削平度合いが不十分で、西南方向に向かって緩く傾斜している。

最大の防御関連遺構は、山頂に接続する各尾根に設けられた堀切である。西南腰郭の直下には、かな



第3図 赤色立体地図上の「上米多比城」遺構 a：曲輪1、b：曲輪2、c：西南腰郭、d：西南尾根堀切、e：南尾根堀切a、f：南尾根堀切b、g：北西尾根堀切a、h：北西尾根堀切b、i：東南尾根堀切 ※Q地図・国土地理院地図を基に、遺構位置記号を筆者加筆



a. 米多比城・「上米多比城」・白ヶ岳城遠景（西→東）



b. 「上米多比城」遠景（西南→東北）



c. 曲輪1 内部（南→北）



d. 曲輪1 南側から曲輪2 全景（北東→南西）



e. 曲輪1 南側切岸（南西→北東）



f. 曲輪2 南端（北→南）



g. 曲輪2 西側切岸・西南腰曲輪北端（北西→南東）



h. 西南尾根堀切・西南腰曲輪切岸（西→東）

第4図 「上米多比城」の各遺構（1） ※筆者撮影



i. 南尾根堀切 a (北→南)



j. 南尾根堀切 b (北→南)



k. 南尾根堀切 b (西南→東北)



l. 北西尾根堀切 a (南西→北東)



m. 北西尾根堀切 b (南東→北西)



n. 北西尾根堀切 b (北西→南東)

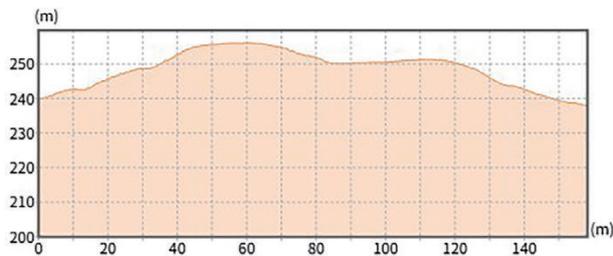


o. 東南尾根堀切 (西北→東南)



p. 北東尾根 (北東→南西)

第4図 「上米多比城」の各遺構(2) ※筆者撮影



第5図 北西尾根堀切b・a、曲輪1・2、南尾根堀切a・b合成断面図

※Q地図・国土地理院地図を基に作成

り埋没が進んでいるが、西南尾根堀切（第3図d、第4図h）が設けられている。曲輪2の南側には、南尾根堀切a（第3図e、第4図i）と南尾根堀切b（第3図f、第4図j・k）の二重の堀切が尾根続きの連絡を遮断している（註6）。曲輪1の北西側も同様で、北西尾根堀切a（第3図g、第4図l）と北西尾根堀切b（第3図h、第4図m・n）の二重の堀切が尾根続きの連絡を遮断する。それに対して、曲輪1の東南側には、東南尾根堀切（第3図i、第4図o）の一箇所のみである。なお、これらの南尾根・北西尾根・東南尾根の堀切は、おそらく掘削時の排出土を曲輪側に盛り上げ、堀切内外を見下ろせる小平場を意図的に構築している。ちなみに、城域に接続する尾根では、「出逢ノ辻」峠・白ヶ岳城方面に連なる北東尾根（第4図p）のみ堀切が設けられていない。これらのことから、「上米多比城」は、築城当時の主要な道筋や村落に近接していた西・南側に特に防御の重点を置いていた状況をうかがい知ることができる。

### 3. 考察

「上米多比城」現存遺構は、堀切の埋没が進み、切岸の傾斜角度がやや緩く、曲輪上の削平がやや不充分に見えるという特徴がある。これらは、花崗岩系岩石（白亜紀深成岩類）の風化土壌という周辺一帯に共通する浸食崩落しやすい土質と関連する可能性がある（註7）。しかし、こうした地質条件は、それほど堀切の埋没が進んでいない近隣の他の中世城郭と基本的にはほぼ共通する。そこで、近隣城郭の構成遺構と比較すると、南の米多比城や北の鶴岳城

と異なり、「上米多比城」は堅堀群や土塁を欠くことが特徴的である。中西義昌による鶴岳城現存遺構の段階的改修過程仮説（中西 1999）を踏まえると、米多比城や鶴岳城よりも「上米多比城」は古い様相をそのままとどめている可能性が考慮される。

また、「上米多比城」の性格を考えるうえで、北東尾根を除き、周囲のすべての尾根を堀切や腰郭で遮断していることが重要である。そして、他の尾根と異なり、北東尾根はかなり痩せ尾根であるが、現地表には堀切などの明確な防御施設痕跡が無く、「出逢ノ辻」峠を経てそのまま白ヶ岳城方向に連絡することが可能である。「上米多比城」は、白ヶ岳城と密接に関連して構築された可能性がある。

これらの点から、「上米多比城」は、米多比城や鶴岳城の現存遺構構築以前の段階に、白ヶ岳城と比較的近い時期かまたは先行して構築され、そして白ヶ岳城・米多比城・鶴岳城よりも早い時期に廃絶された中世城郭の可能性が推察される。その築城主体は、大友氏配下となる頃の薦野氏・米多比氏に関連する在地勢力と考えられる。

### 註

- 1) 「全国Q地図：地形図・地理空間情報の統合閲覧サイト」(<https://info.qchizu.xyz/>)
- 2) 赤色立体地図（第2図）と現地踏査で、米多比城山城部についても、城域がさらに南側210mほどまで広がる可能性が高い状況を確認した。現在山城部の最南端として認識されている曲輪I南側の堀切で遮断されている南西尾根上にも、四～五段ほどの小規模な階段状の造成地形を識別できた。そして、そこから西側に分岐する尾根上にも堀切一箇所、また南東方向に分岐する自然地形の尾根最高所南側直下にも土橋を伴う堀切一箇所を新たに確認した。
- 3) 当初の米多比氏の拠点は、現在の米多比・上米多比地区ではなく、薦野地区のすぐ北側に隣接する福津市舍利蔵地区にあったとする見解がある（古賀町誌編纂委員会編 1985：655頁）。薦野地区の天降神社の由緒書にある祭式の担い手として「ウスガ嶽、ツグミガ嶽両城」の「両山代官」という記述がある。また、同社に1537（天文6）年に奉納された鐘の銘文に「米多比家繩・薦野宗家」という記載があり、さらに舍利蔵地区（勝宝寺跡西側）に米多比氏の祖先のものとする墓塔（一石五輪塔二基）もあることから、米多比氏が鶴岳城にいたことが示唆されている（古賀町誌編纂委員会編 1985：655-656頁）。
- 4) 「上米多比城」と米多比城にはさまれた米多比川上流の最奥部の溪谷を「不入谷（いらんたん）」と呼び、禁忌地であったとする伝承がある。「ここに昔尊い方がいられて、家来が嚴重に警固して一足も谷に入る事を許されな

かった」(結城編 1957:151頁)とされ、その「禁忌破り」にまつわる貴種流離譚・稀人來訪譚・ハンセン病者差別などとの関連が示唆される悲恋伝承がある。近世以前に、この地域に特別視される一画があったとみなされるが、関連遺構などの存在は不明確である。

- 5) 「古賀市都市計画総括図」(<https://www.city.koga.fukuoka.jp/uploads/files/master/soukatuzu201403.pdf>)
- 6) 南尾根南端から南西に分岐した尾根の南端にも一箇所切岸状の地形(第2図)がみられるが、南尾根堀切bとこの切岸状地形との間の約140mはほぼ自然の尾根地形が続いているため、城域とはいったん区別しておく。
- 7) 臼ヶ岳城と「上米多比城」の尾根に通じる「出逢ノ辻」峠道の谷間一帯の小字名を「貝地」と呼び、「貝地池」という池もある。薦野地区北側の清滝の不動山と同じく、1614(慶長19)年の大豪雨の際の土砂災害によって出現した法螺貝の伝承に関連する地名とされる(結城編 1957:151頁、古賀郷土史研究会 HP「45、[貝舞・貝地]の地名由来」)。こうした土砂災害は、戦国期のこの地域の山頂部一帯における多数の城郭築造に伴う大規模な地形改変や乱伐の後遺症に関わる可能性も考えられる。

## 引用・参考文献

- 岡寺良編 2015『福岡県の中近世城館跡』Ⅱ(筑前地域編2)、福岡県文化財調査報告書第250集、福岡県教育委員会(福岡)
- 木島孝之・中西義昌 1998「天正中・後期の北部九州における城郭の様相」、『戦国の城と城下町』Ⅱ(鳥栖の町づくりと歴史・文化講座):34-86頁、鳥栖市教育委員会(佐賀)
- 古賀町誌編纂委員会編 1985『古賀町誌』、古賀町(福岡)
- 中西義昌 1999「小規模山城・丘陵の縄張り構造にみる小規模在地勢力の様相:筑前糟屋郡・席田郡・志摩郡を中心に」、『愛城研報告』第4号:200-219頁、愛知中世城郭研究会(愛知)
- 中西義昌・岡寺良 2001『歴史史料としての戦国期城郭:北部九州における城郭遺構と地域権力』、花書院(福岡)
- 中村修身・村上勝郎(福岡県の城郭刊行会)編 2009『福岡県の城郭:戦国城郭を行く』、銀山書房(福岡)
- 結城一義編 1957『小野村誌』、粕屋郡小野村(福岡)

伊藤 慎二(いとう しんじ) 国際文化学部教授

# 赤色立体地図による福岡県糸島市域の新遺跡探索（如意南3号墳・次久松尾城）

伊藤 慎二・秋田 雄也

## はじめに

近年、利用可能な地理的範囲と利便性が大きく向上した赤色立体地図（全国Q地図 MPI 赤色立体地図）を基に、2025年8月に糸島市域の主要遺跡周辺を確認していたところ、未周知の遺跡と考えられる事例を複数確認した。そこで、微細な地形を判別しやすい草木の冬枯れ時季を待って同年12月に現地踏査を実施した結果、糸島市高祖の如意南（高祖東谷）古墳群で古墳時代前期の前方後円墳と、糸島市飯原で中世城郭を新たに確認した。本稿では、これらの今回新たに確認した遺跡の概要を報告し、関連する諸課題について考察を行う。

なお、以下の本文は、(1) 如意南3号墳を秋田雄也、(2) 次久松尾城の執筆と全体の編集を伊藤慎二が行った。

## I. 各遺跡の概要

### (1) 如意南（高祖東谷）古墳群と如意南3号墳

#### a. 地理的特徴と研究史

今回発見した前方後円墳の名称は如意南3号墳（仮称）とする。本古墳が位置するのは糸島市西部、福岡市との境に位置する高祖山西斜面尾根上の如意南（高祖東谷）古墳群である（第1図、第2図、第3図a）。

古墳の名称について最初に簡単に整理したい。同一尾根上に高祖東谷1号墳（第2図a、第3図b）と如意南古墳群が存在している。高祖東谷1号墳以外の古墳は、如意南1号墳（第2図b、第3図c）・2号墳（第2図c）で周知の埋蔵文化財包蔵地と

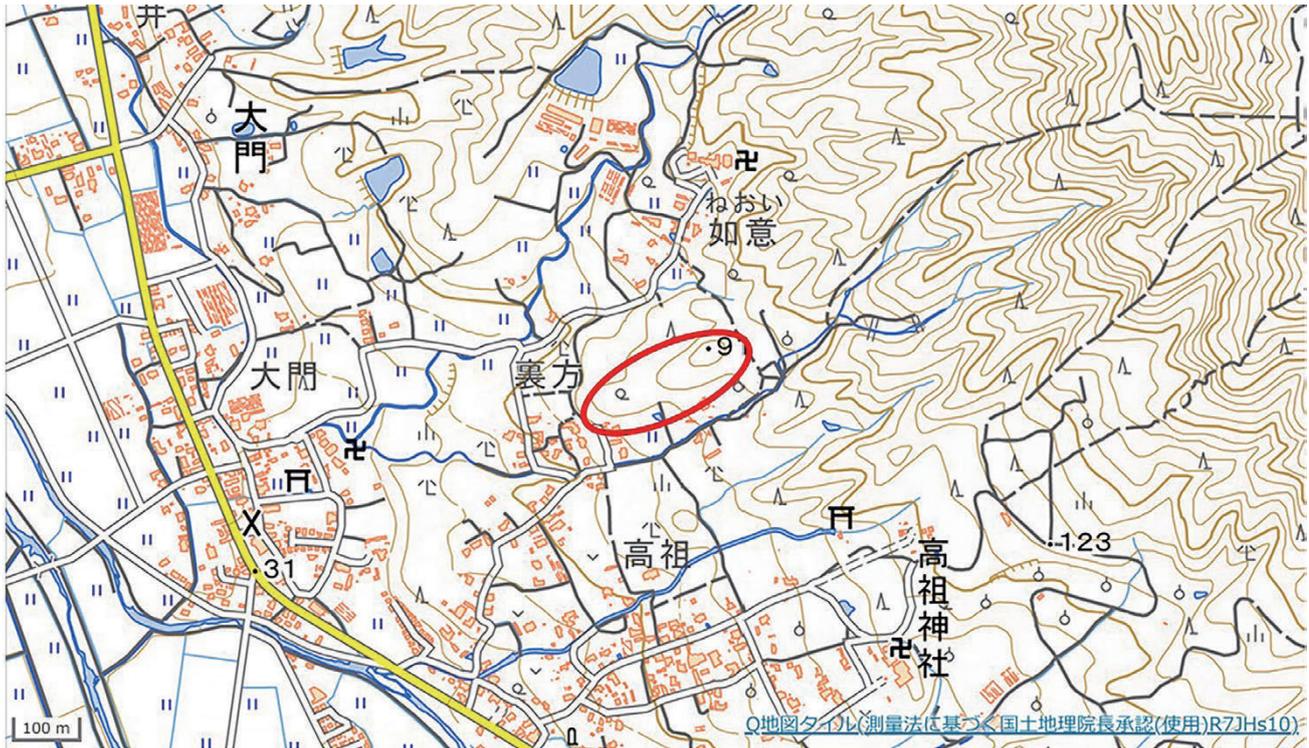
なっている。本報告の前方後円墳を如意南3号墳（第2図d、第3図e・f・g・h）、最も東側で新たに確認した円墳を如意南4号墳（第2図e、第3図d）としたい。これら5基の古墳が位置する尾根の小字は「如意」（図1）のため、将来的に名称の検討・整理が必要である。如意南3号墳と如意南4号墳については本稿では仮称として扱う。

如意南1・2号墳の尾根続きの西側方向に高祖東谷1号墳（第2図a、第3図b）がある。1983（昭和58）年に確認調査が実施され、前方部2段・後円部3段築成で後円部裾に葺石を有し、主体部は刳拔式木棺と箱式石棺を持つことが判明している（岡部編 2003）。墳形は前方部が低く、クビレ部が細く締まり、前方部に向かって撥型に開く古式の特徴を持つ。全長約35mで、古墳時代前期（4世紀前葉）の小形前方後円墳である。刳拔式木棺の攪乱坑内からベンガラベンガラの付着した鉄刀・鉄剣・不明鉄器片が出土しており、本来は木棺内に含まれていた遺物と推定されている。刳拔式木棺は国史跡今宿古墳群の若八幡宮古墳（福岡市西区徳永）との類似性が指摘されている。

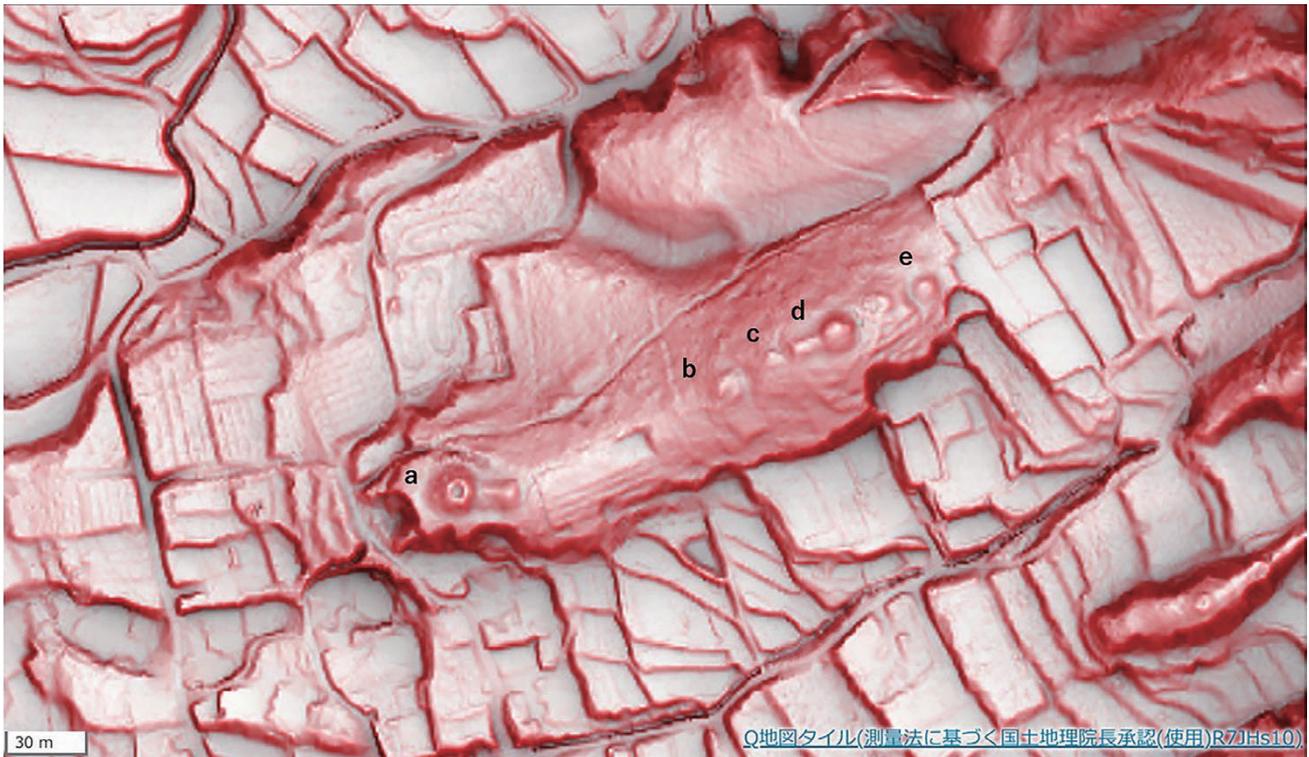
なお、如意南1・2号墳（第2図b・c、第3図c）については、これまで詳しい調査が行われていない。

#### b. 如意南3号墳の特徴

如意南3号墳（第2図d、第3図e・f・g・h）は、先述の高祖東谷1号墳・如意南1・2号墳と同じ尾根続きの東側に隣接して位置する（第2図）。周辺には古墳時代前期の古墳が多く、怡土平野の大形前方後円墳として端山古墳（全長78m）・築山古墳



第1図 如意南(高祖東谷)古墳群(赤丸)の位置 ※Q地図・国土地理院地図を基に、古墳群位置を筆者加筆



第2図 赤色立体地図上の如意南(高祖東谷)古墳群 a:高祖東谷1号墳、b:如意南1号墳、c:如意南2号墳、d:如意南3号墳、e:如意南4号墳 ※Q地図・国土地理院地図を基に、古墳群記号を筆者加筆



a. 如意南（高祖東谷）古墳群遠景（南西→北東）



b. 高祖東谷1号墳（北東→南西）



c. 如意南1号墳（北→南）



d. 如意南4号墳（新発見）（北→南）



e. 如意南3号墳（新発見）前方部から後円部（西→東）



f. 如意南3号墳後円部（北→南）



g. 如意南3号墳後円部上から前方部（東北→南西）



h. 如意南3号墳後円部斜面の葺石露出部（東→西）

第3図 如意南（高祖東谷）古墳群 ※筆者撮影

(全長60m)、南側の井原地区には中形の前方後円墳として井原1号墳(全長43m)が現存する(河合編2022)。

如意南3号墳の墳丘は、おそらく前方部2段・後円部は3段に造成されており、後円部の方が高く、前方部上はほぼ平坦である(第3図e・g)。また、前方部と後円部に葺石露出箇所があり、大きなもので30~40cm程度の花崗岩を用いている(第3図h)。後円部墳頂に凹みは確認できないため、未盗掘の可能性が高い。墳長は高祖東谷1号墳より小さく、地図上の計測では約27mである。墳形は赤色立体地図でも鮮明であるが、前方部が直線的な柄鏡形をしており、古墳時代前期前葉の特徴を持つ(第2図d)。

### c. 考察

如意南3号墳の時期は、これらの特徴から古墳時代前期前葉に位置付けられる。本古墳の近隣では、端山古墳の墳形に近く、墳形のみに着目すると前方後円墳集成2期(広瀬1992、柳沢1992)に位置づけられる。立地に注目すると、尾根先端部に立地する高祖東谷1号墳が先行する可能性があるが、本古墳は前方部が現状平坦で未発達な様子もうかがわれるため、両古墳の新旧については慎重に判断する必要がある。墳形に近い端山古墳との関連性など、イト・シマ地域、特に怡土平野の古墳時代開始期を考える上で非常に重要な古墳といえる。

本稿では新たに発見した如意南3号墳(仮称)について現地踏査による簡単な所見を述べた。現時点では測量などの本格的な調査を行なっておらず、遺物も確認できていないため、正確な規模や時期などは今後の調査の課題である。

## (2) 次久松尾城

### a. 地理的特徴と周辺城郭

糸島市飯原字次久の山林中にあるこれまで存在が確認されていなかった中世城郭遺跡である。古代山城の雷山神籠石推定範囲に隣接した西北側尾根上にある(第4図a)。雷山神籠石の壘壁西側推定線は、

ダム湖不動池に沿っておおよそ南北方向に続く尾根上である。その尾根からは、西北山麓の飯原地区に向かって降る尾根が深い沢にはさまれて多数分岐している。それらの尾根の一つに次久松尾城がある。周辺の林道や散策路からもかなり外れた、やや急峻な尾根上にある。尾根上の大部分は、少なくとも最近ほとんど人手が加わっていない密な植生に覆われている。下草の枯れる冬季以外は、到達がやや難しい位置にある。近隣の中世城郭としては、旗振嶺城(第4図b)が知られる。

地誌類では、雷山周辺に複数の中世城郭の名が記されている。最古の記述は、貝原益軒らにより1709(宝永6)年に編纂された『筑前国続風土記』中にある。卷二十八・古城古戦場五の「怡土城」(実際には雷山神籠石)記述中に、「又旗振峯の西南に、少なる城址有。其下にから隍あり。是は原田氏の旗下西左近鎮兼、原田隆種に背き、肥前に与せしを、原田氏はを責めんとしけれど、此所に逃来りて籠りし所也。鎮兼は終に原田氏に責亡さる」(伊東校訂2001:640-641頁)とある。

そして、福岡県が1872(明治5)年~1880(明治13)年にかけて編集した『福岡県地理全誌』では、「飯原村」の「古蹟」に関する項で、「筒山城址」と「松尾城址」に関する記述が登場する。「筒山城址 雷山ノ半腹、不動山ニアリ。筒瀧ヲ隔テ、東旗振山ニカカリ、石垣残レリ。西長門守興隆カ居城ナリシト云。怡土ノ城址ニ抛リテ、再ヒ城ヲ構ヘシナルベシ」(西日本文化協会編1995:612頁)、「松尾城址 筒山ノ西南ニアリ。西掃部森国ト云者、居タリシト云」(西日本文化協会編1995:612頁)と記されている。古代山城の雷山神籠石(怡土ノ城)の一部を、西長門守興隆が城郭として再利用したことが初めて言及されている。しかし、『筑前国続風土記』に記された西左近鎮兼が最後に籠城した城については言及が無い。

地域の各小学校長より寄せられた草稿を元に水月哲英らの編纂で1927(昭和2)年に刊行された『糸島郡誌』では、さらに複雑な説明となる。新たに、「旗振嶺城址」(福岡県糸島郡教育会編1927:746

頁)の名が登場するが、その内容は『筑前国続風土記』の「旗振嶺の西南」の「少なる城址」とほぼ同内容である。「旗振嶺城址 旗振嶺の西南に在り。其下に空隍あり。原田氏の旗下西左近鎮兼原田隆種に背き肥前に与せしを原田氏之を攻めんとしければ、此処に逃げ来り籠りし所なり。鎮兼は終に原田に攻亡さる」としている。「松尾城址」については「飯原箕振岳の西に連なりたる処にあり。西掃部森国の居城なり」(福岡県糸島郡教育会編 1927:685頁)とする。そして、「筒山城」ではなく、「筒城」という城郭をめぐる歴史が詳しく記されている。ここでは、高祖城の原田氏の配下で、原田興種の幸老であった怡土郡長野庄にある筒城主の西五郎左衛門尉重国という人物の名をあげている。原田隆種(了栄)が原田家当主となった後、1553(天文22)年に(居城の高祖城が中国地方の陶晴賢と豊後の大友氏の連合軍の攻撃を受け)原田氏が一時混乱した頃、西重国は肥前の龍造寺隆信に内通したという。そこで、原田隆種は、深江宮内少輔・納富越後を大将とし、近藤左近・得永弥五郎を副将とする500人以上の軍勢を筒城に差し向けた。西重国は西左衛門四郎とともに肥前の龍造寺氏に援兵を要請に向かったが間に合わず、西一族主従150人が斬殺され、筒城は一昼夜で落城した。西重国も龍造寺氏への再度の援兵要請途中、久留米市の高良山麓で清原左京・大神甚太夫により殺害されたという(福岡県糸島郡教育会編 1927:104頁)。これは、『筑前国続風土記』・『福岡県地理全誌』には無かった伝承記事である。また、『福岡県地理全誌』にあった「筒山城」と西長門守興隆の名が消え、「筒城」と西五郎左衛門尉重国の名が新たに登場している。

しかし、『糸島郡誌』におけるその後の西氏に関する記述(福岡県糸島郡教育会編 1927:104-106・644頁)は、若干の差異はあるものの、『筑前国続風土記』巻二十八・古城古戦場五の怡土郡「宝珠岳古城」とほぼ同じ内容である。『筑前国続風土記』の「宝珠岳古城」の記事(伊東校訂 2001:641-642頁)を以下に要約する。怡土郡長石村の宝珠岳城は大友氏家臣の西左近鎮兼の居城で、1567(永禄10)年9

月10日に原田隆種(了栄)の800人以上の軍勢が攻略に向かった。西鎮兼は、「波呂辺」(波呂城)(『糸島郡誌』105頁では、西鎮兼の弟で瀬戸村天降天神の「社務」でもある西長門守豊国の「瀬戸の要害」)で防戦するが破られ、宝珠岳城に籠城する。原田隆種の軍勢は、宝珠岳城下に関の声を上げ攻め込んだが、城内からも反撃の兵が出て鉄砲戦となり、攻防は停滞する。そこで、原田隆種は馬を降りて、四尺以上の太刀を振りかざして自ら先陣を切り、原田家家臣の石井・上原・鬼木・富田・池園らが一挙に攻め込んだため、西鎮兼は宝珠岳城を放棄した。西鎮兼は山伝いに逃れ「一貴山の嶺」に登り原田勢を再び待ち構えたが、原田勢から一斉に矢を射かけられたことでこの場所も陥落し、さらに逃れて「雷山旗振嶺」に引き籠った。そして、原田隆種配下の岩熊(岩隈)氏・波多江氏らの軍勢が山中を踏み進んでここにも攻め寄せ、西鎮兼は数十人の原田勢を切り伏せたものの、追い詰められ切腹して果てたという。この時点までに、西鎮兼には40人ほどが従っていたが、最終的に自害者や落ち延びた者のほかに、10数人が原田方に生捕られたとされる。

『筑前国続風土記』中の西左近鎮兼は、「怡土城」と「宝珠岳古城」の記述の間で、肥前(龍造寺氏)方、あるいは大友氏家臣とする相違点がある。また、波呂・宝珠岳・一貴山までだいに西南方向に向かう近距離間移動に比べて、最後に逆方向の東方にかなりの移動距離がある雷山旗振嶺が登場すること、やや違和感が残るといえる。

このように、地誌の記述を比較して総合すると、雷山周辺には、①雷山神籠石北水門・列石付近の旗振山・筒山付近の城郭と、②それらの山から西南または西方向にある松尾城(『糸島郡誌』のいう「旗振嶺城」)の二つが少なくともあった可能性が高いといえる。そして、人名に異同はあるが、いずれも原田氏から離反した西氏関係の城郭とすることですべて一致している。

雷山周辺の中世城郭に関する調査研究も進展している。中西義昌は旗振山城を松尾城と同一とみて「旗振山(松尾)城」とし、現存遺構の特徴をはじめ

て明らかにした(中西 2004:120-121頁)。それによると、旗振山の山頂部はほぼ自然地形をそのまま利用した主郭部であり、東側斜面に切岸を加えた二つの帯曲輪と西南方向斜面に二本の堅堀を確認し、南側谷部山裾の人工的な地形改変も示唆している。福岡県の中近世城館遺跡詳細分布調査成果報告では、「筑前335旗振嶺城」と「筑前333筒城」・「筑前334松尾城」に区別している。そして、旗振嶺城の現存遺構については中西義昌の「旗振山(松尾)城」の調査成果を再確認するとともに、地誌の「筒山城」・「筒城」も「旗振嶺城」と同一城郭を指している可能性を指摘している(岡寺編 2015:28・29・208頁)。また、「筑前334松尾城」については、『福岡県地理全誌』や『糸島郡誌』が記述する地理的位置に存在する可能性を指摘するが、遺構未確認のため詳細不明としている(岡寺編 2015:28・29頁)。近年では、山崎龍雄が西氏関連城郭の網羅的な調査成果をまとめている(山崎 2022)。雷山周辺では「旗振嶺城」の現存遺構の詳細な再調査が行われ、16世紀代の白磁皿片の散布も報告されている(山崎 2022:6・7頁)。そして、「旗振嶺城」の近隣の雷山神籠石の尾根上平坦面に「筒山城」があった可能性も示唆するが、「松尾城」については特に言及が無い。

このように、地誌で言及された城郭の方角位置や遺構の特徴、現在までのこの地域における中世城郭研究成果を検討すると、以下に紹介する今回新たに確認した城郭遺構は「松尾城」に相当する可能性が高いと考えられる。しかし、これまでの経緯の混乱を避けるため、本稿では現在のこの地域の小字名をとって「次久松尾城」と名づけることにする。

## b. 遺構の特徴

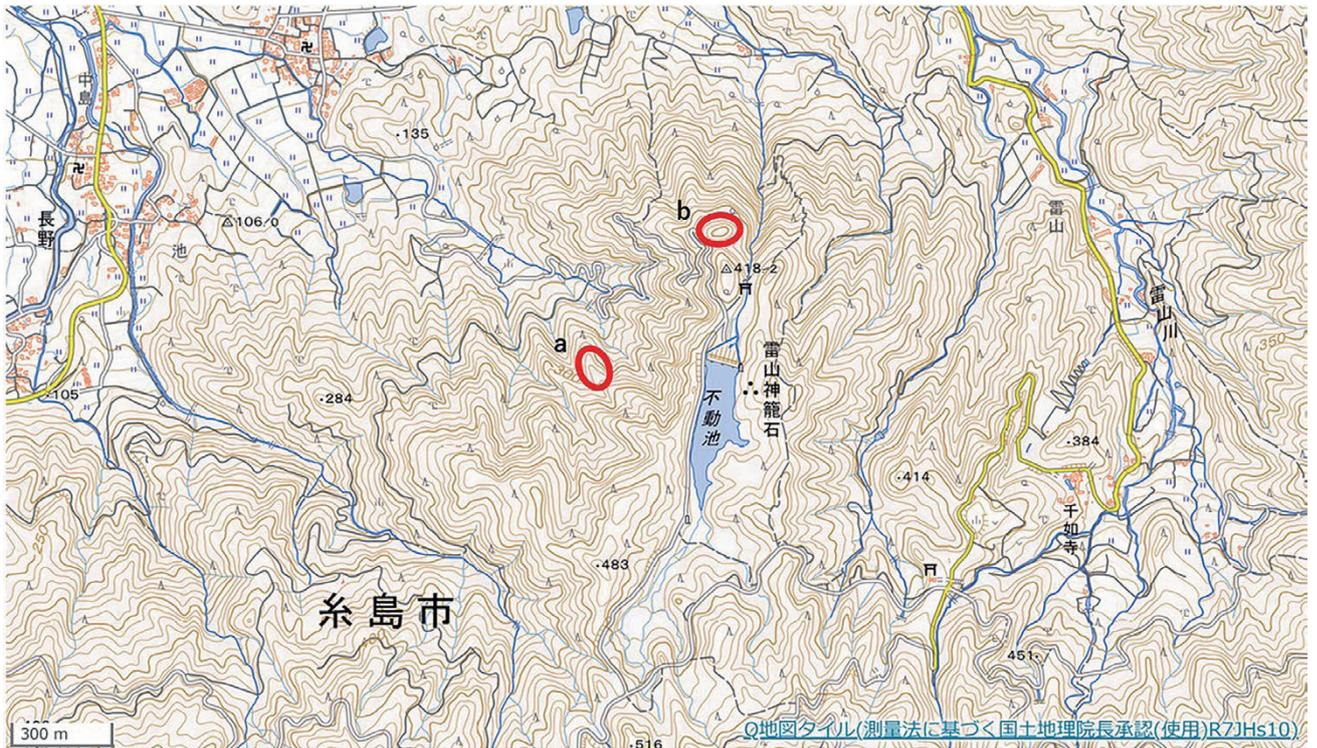
北西方向に降る尾根上の標高310~330mほどの位置に、約80mにわたってほぼ直線的に一列に並び主要遺構が展開する(第5図・第7図)。中央部に二つの主要な曲輪があり、その南北方向の尾根続きを大規模な堀切で遮断している。

北西方向から尾根伝いに登って城域に向かうと、

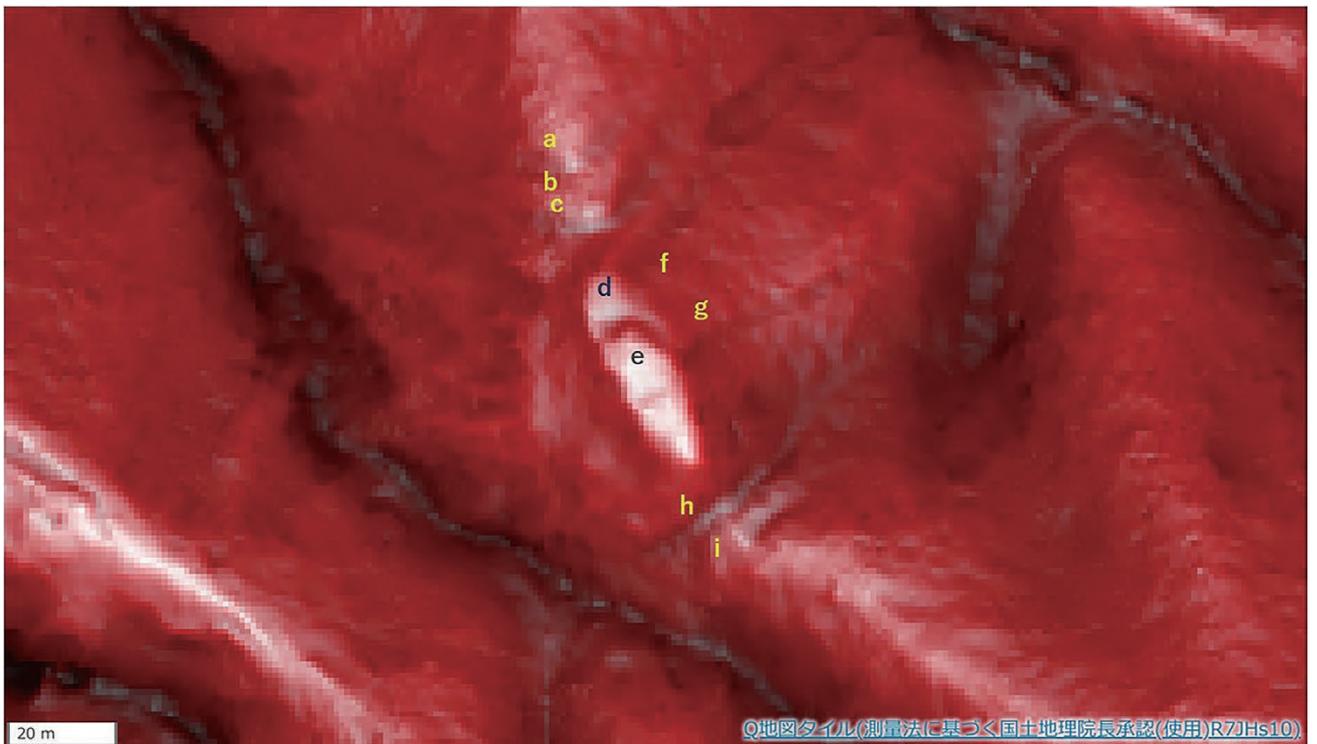
城域北端を区切る二重の堀切に直面する。最初に北側堀切b(第5図a、第6図a・b)が行く手を阻む。北側堀切bの南側は、植生が繁茂して見通しが効かないが、北側堀切bと北側堀切aの間の5mほどの間に、短く低い堅土塁三列に挟まれた短い堅堀二列がおおよそ北東-南西方向に並走しているのを確認できる(第5図b、第6図a)。もっとも東側の低い堅土塁は、尾根東縁上に沿っている(第6図c)。もっとも西側の低い堅土塁は地山の岩脈露頭を一部組み込んでいる。堅堀堅土塁群の南側には、堅堀aよりもさらに大規模な北側堀切aが控える(第5図c、第6図d・e)。北側堀切aの背後には、曲輪2の高さ10m近い切岸が屹立する(第6図f)。

中心部分には、北から南に曲輪2(第5図d、第6図g)と主郭である曲輪1(第5図e、第6図j)が、数mの切岸(第6図g奥側)で隔てられながら連続する。城域内で最大で最高所の曲輪1は、長軸約25mの楕円形状で、内部は平坦でかすかな階段状に削平されている(第5図e、第6図j)。ほぼ中央部分と南寄りの2箇所わずかな段差があり、北・中・南側の順に高くなっている。面積は最小であるが城内で最高所の南側段差部分は、南側堀切内(第5図h、第6図m)や雷山神籠石方面の尾根線も見通すことが可能な場所で、櫓台であった可能性がある。曲輪1の東北隅側には、曲輪2に通じる平入りの坂虎口がある(第6図i)。曲輪1東北縁から坂虎口に向けたある程度横矢的な効果も意識していた可能性がある。また、北西縁上部に地山の變成岩系岩塊を利用した石積み残存露出箇所を確認した(第6図k)。曲輪1よりも一段低い曲輪2も、内部は平坦に削平されている(第5図d、第6図g)。曲輪1と同様に、曲輪2西縁上部にも變成岩系岩塊を利用した石積み残存露出箇所を確認できた(第6図h)。曲輪1東北側斜面と曲輪2東北側斜面には、それぞれ堅堀が一本設けられている(第5図f・g、第6図l)。曲輪2の堅堀fは、北側堀切aに並走している。

曲輪2の南側は、かなり大規模な南側堀切(第5図h、第6図m・n・o)が城域南端を画している。



第4図 次久松尾城と周辺の中世城郭 a：次久松尾城、b：旗振嶺城  
 ※Q地図・国土地理院地図を基に、城郭位置・記号を筆者加筆



第5図 赤色立体地図上の次久松尾城遺構 a：北側堀切b、b：竪堀壘土塁群、c：北側堀切 a、d：曲輪2、e：曲輪1、f：竪堀b、g：竪堀a、h：南側堀切、i：土塁 ※Q地図・国土地理院地図を基に、遺構位置記号を筆者加筆



a. 北側堀切 b (手前)・豎堀豎土壘群 (奥) (北西→南東)



b. 北側堀切 b (北→南)



c. 豎堀豎土壘群東端 (西北→東南)



d. 北側堀切 a (西北→東南)



e. 北側堀切 a・曲輪 2 北側切岸から (南西→北東)



f. 曲輪 2 北側切岸 (北西→南東)



g. 曲輪 2 内部 (北西→南東)



h. 曲輪 2 西縁上部の石積み (西→東)

第 6 図 次久松尾城の各遺構 (1) ※筆者撮影



i. 曲輪1 東北側の虎口・曲輪2側から (北東→南西)



j. 曲輪1 内部・段差 (北→南)



k. 曲輪1 北西縁上部の石積み (南西→北東)



l. 曲輪1 東北側斜面の堀 a (北西→南東)



m. 南側堀切・曲輪1 南端から (西北→東南)



n. 南側堀切・曲輪1 南東側切岸 (東→西)

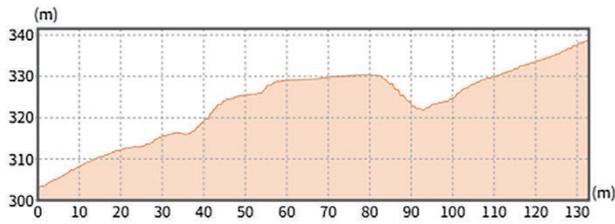


o. 南側堀切 (北東→南西)



p. 南側堀切南東部の土塁 (南東→北西)

第6図 次久松尾城の各遺構 (2) ※筆者撮影



第7図 北側堀切b・a、曲輪2・1、南側堀切合成断面図  
※Q地図・国土地理院地図を基に作成

堀底から曲輪1南端上部までの比高差は約10mで、堀切の上幅は20m以上である。『筑前国統風土記』の「から隍」は、おそらくこの場所を指すとみられる。特徴的なのは、南側堀切堀底内の南側には、堀切に並走して一段高い幅狭の段差空間が設けられていることである。その最西端は堀切に直交する向きの土塁（第5図i、第6図p）が区切っている。この土塁や段差空間の性格は、城域西側の沢筋方向からの外敵侵入に備えたためか、あるいは土塁部分は堀切をまたぐ木橋の橋脚台の一部であった可能性などが考えられる。南側堀切の南東側は、また自然地形のやや険しい尾根となり、その尾根を登りきると雷山神籠石の西側尾根に到達する。

### c. 考察

近隣の旗振嶺城と次久松尾城は、地誌の同じ文脈で記されることが多く、そのことが混同の一因になっていた。しかし、おそらく両城郭が機能していた時期も、距離的な近さと双方の異なる立地の利点から、一体的に運用されていた可能性も考えられる。要害性に優れて西北側の飯原や波呂城・宝珠岳城方面への視界が開けた次久松尾城に対して、糸島平野の広域を一望できる旗振嶺城が、本城と出城的な相互補完機能を果たしていたことも充分想定可能である。

次久松尾城で今回確認した遺構は、これまで中西義昌・岡寺良・山崎龍雄によって詳しく調査されてきた西氏関連の城郭（中西 2004、岡寺編 2015、山崎 2022）や、原田氏の高祖城とその支城（中西 2004、岡寺編 2015、山崎 2021）と比較すると、構造的にやや差異が目立つ。特に深い関連性が推察される西氏の宝珠岳城・波呂城・旗振嶺城は、いず

れも小規模な単郭構成の曲輪に堀切が伴う程度である。次久松尾城も小規模であるが、現存遺構から判断する限りでは、糸島市域でも屈指の技巧的な縄張りの中世城郭と評価できる。地誌の記述にあった西氏と肥前龍造寺氏との関係や、その直後に起きた龍造寺氏の筑前への侵攻過程（山崎 2024）との関連性についても、今後の重要な検討課題といえる。

## II. まとめ

今回、赤色立体地図上での糸島市域の探索を基に、現地調査を行った結果、これまで未確認であった古墳と中世城郭を新たに確認することができた。微地形を精細にとらえる赤色立体地図の特性は、地形を人工的に改変した部分が多い古墳・中世城郭・寺院遺跡などの調査に非常に有効であることを改めて確認できた。糸島市域には、今回取り上げた以外にも、古墳や中世城郭の可能性のある微地形を赤色立体地図上で識別可能な場所がほかにも複数あり、それらの現地調査も今後の課題である。

### 引用・参考文献

- 伊東尾四郎校訂（貝原益軒著） 2001『筑前国續風土記』、文献出版（東京）
- 岡寺良編 2015『福岡県の中近世城館跡』Ⅱ（筑前地域編2）、福岡県文化財調査報告書第250集、福岡県教育委員会（福岡）
- 岡部裕俊編 2003「付 高祖東谷1号墳」、『井原1号墳』（前原市文化財調査報告書第83集）：23-34頁・図版8-12、前原市教育委員会（福岡）
- 河合修編 2022『糸島 古墳図鑑』、令和3年度伊都国歴史博物館展示図録、糸島市立伊都国歴史博物館（福岡）
- 岸本直文 2011「古墳編年と時期区分」『古墳時代史の枠組み』（古墳時代の考古学1）：34-44頁、同成社（東京）
- 中西義昌 2004「戦国期城郭にみる戦国期国衆の領国構造：縄張り研究に基づく戦国期北部九州の基礎的考察」、『中世城郭研究』第18号：102-142頁、中世城郭研究会（東京）
- 西日本文化協会編 1995『福岡県史』（近代史料編 福岡県地理全誌六）、福岡県（福岡）
- 広瀬和雄 1992「前方後円墳の畿内編年」、『前方後円墳集成』（九州編）：24-26頁、山川出版社（東京）
- 福岡県糸島郡教育会編 1927『糸島郡誌』[再版 1972、名著出版（東京）]
- 柳沢一男 1992「筑前」、『前方後円墳集成』（九州編）：31-40頁、山川出版社（東京）
- 山崎龍雄 2021「筑前国衆原田氏の城：高祖城を取巻く支城群」、『七隈史学』第23号：66-86頁、七隈史学会（福岡）

山崎龍雄 2022「糸島戦国史：原田氏と争った西氏の城」、  
『北部九州中近世城郭情報誌』43：1-8頁、北部九州中近世  
城郭研究会（福岡）  
山崎龍雄 2024「龍造寺氏の筑前国侵攻」、『龍造寺隆信の実

像に迫る』（第11回九州城郭研究大会資料集・北部九州中  
近世城郭研究会研究大会資料集第24集）：61-78頁、北部九  
州中近世城郭研究会（福岡）

伊藤 慎二（いとう しんじ）

国際文化学部教授

秋田 雄也（あきた ゆうや）

糸島市地域振興部生涯学習課主任



# 西南学院大学博物館所蔵 「楽譜付きミサ典書写本断片」(1)

西脇 純・栗田 りな

## はじめに

西南学院大学博物館所蔵の『楽譜付きミサ典書写本断片』(資料番号:C-b-140、以下本資料)は、1150年頃にドイツ・ラインラント地方で制作されたとみられるミサ典書 Missale の写本断片である。

ミサ典書 Missale とは、ローマ・カトリック教会でミサを執り行う際に用いられる儀式書を指す。一般に祈願文、聖書朗読箇所、ミサ奉献文などを収録する例が多い<sup>1</sup>。

本資料は、より厳密には、9世紀後半頃から存在が確認できる「ミサ全書 Missale plenarium もしくは Missalis plenarius」と呼ばれるタイプに属する。これは、司祭が用いる秘跡書 Sacramentarium、朗読者用の朗読聖書 Lectionarium、聖歌隊のための聖歌集 Antiphonarium / Graduale など、役割分担ごとに制作されたミサ用の諸典書を、司式者が一人で(あるいはごく限られた典礼奉仕者とともに)ミサを挙行できるよう一書にまとめたものである<sup>2</sup>。なかでも、入祭唱や奉納唱などのミサ固有唱 proprium Missae の聖歌テキストがネウマと呼ばれる記譜記号とともに記載され、いわば「楽譜付きミサ典書」となっているところに本資料の大きな特徴がある<sup>3</sup>。

この特徴のゆえに本資料は、所蔵館にて開催されたテーマ展示「楽譜とことば一祈りの歌のカケラたち」(2023年12月～2024年4月)や<sup>4</sup>、國學院大学博物館にて開催された相互貸借特集展示「祈りの歌の泉をたずねてーグレゴリオ聖歌のあゆみ」(2025年10月～2026年1月)など<sup>5</sup>、グレゴリオ聖歌

にまつわる展示資料としても活用されている。

本稿は本資料の内容と特徴を紹介する試みであるが、今回は、まず、本資料の背景に横たわるキリスト教の「典礼暦」、なかでも本資料の内容に深く関わる「復活節」についてのごく手短かな素描から始めたい(1.)。続いて、本資料の内容とその特徴を概観する(2.)。本資料の収録聖歌については別項目を立てて述べる(3.)。本資料の形態やレイアウト、書体についても、現時点で推測できる範囲で記そう(4.)。

## 1. 典礼暦と復活節

仏教やユダヤ教、イスラームなど他の多くの宗教同様、キリスト教にも「教会暦 church calendar」もしくは「典礼暦 calendarium liturgicum / liturgical calendar」と呼ばれる独自の暦があり、キリスト教(ここでは本資料が前提とするローマ・カトリック教会)の主要な儀式はこの暦に従って営まれる。

典礼暦の根幹をなすと同時にその頂点でもある祭事は、キリストの復活を祝う復活祭である。ユダヤ教の過越祭を背景とするこの祭りは、すでに新約聖書にもその原初形態への言及がみられる(1コリント5章7節以下ほか)<sup>6</sup>。

その後、復活祭をユダヤ暦のニサンの月の14日の直後の日曜日に祝うというニケーア公会議(325年)の決議を受け、古代教会は、イエスの受難と復活をひとつの分かち難い出来事として記念するための「過越の聖なる三日間 Sacrum Triduum Paschale」と呼ばれる祭日を整備していった。この三日間を頂点として、この前に聖週間(過越の聖なる三日





間を含む)と四旬節などの準備期間が、また、この三日間の後、聖霊降臨祭まで50日間続く「復活節 tempus paschale」と呼ばれる祝祭期間が置かれるようになった<sup>7</sup>。

本資料に記載されている典礼は、祈願文や聖書朗読箇所、また聖歌の内容からみて、いずれも復活節の典礼に属すると推察される。ただし、50日間の復活節のどの典礼日に用いられたか、祈願文が集会祈願 collecta、奉納祈願 oratio super oblata / secreta、拝領祈願 oratio post communionem のいずれであるかなどの詳細については確言できず、これらは今後の調査課題である。現在進めているテキストの解説作業の成果を、他の同時代資料と比較検討することにより、ある程度の推察も可能になるとと思われる。

## 2. 本資料の内容と特徴

本資料は4ページからなる零葉である。便宜上それらを、*a recto*、*a verso*、*β recto*、*β verso* と呼ぶ(図1)。各ページの「行数」は「*l.* (エル) + 数」

で表す。

本資料は基本的にラテン文字で記されているが、「キリスト」を「*χρ* [+語尾変化]」と表記するなどの例外もみられる。不明部分を除き本稿執筆時点で調査を終えている本資料の内容は以下のとおりである(表1)。

本資料の聖書朗読箇所のテキストをウルガタ聖書の校訂版のそれらと照らし合わせると<sup>13</sup>、ミサ典礼書ならではの異読が散見される。本資料のテキストにおいて、福音朗読の直前に冒頭句「*in illo tempore* そのとき」が必ず挿入されるのはその最たる例である。これは伝統的に「導入のことば *verba introductoria*」と呼ばれている典礼用の付加部分の一つである。

また、たとえば、マタイ福音書28章8節を掲載する本資料 *a recto* の *l.* 17 において、ウルガタ版では「*exierunt cito de monumento* 彼らはすぐに墓から立ち去った」とあるところを、本資料では「*exierunt mulieres de monumento* 婦人たちは墓から立ち去った」と、「立ち去った」のが「婦人たち」であること

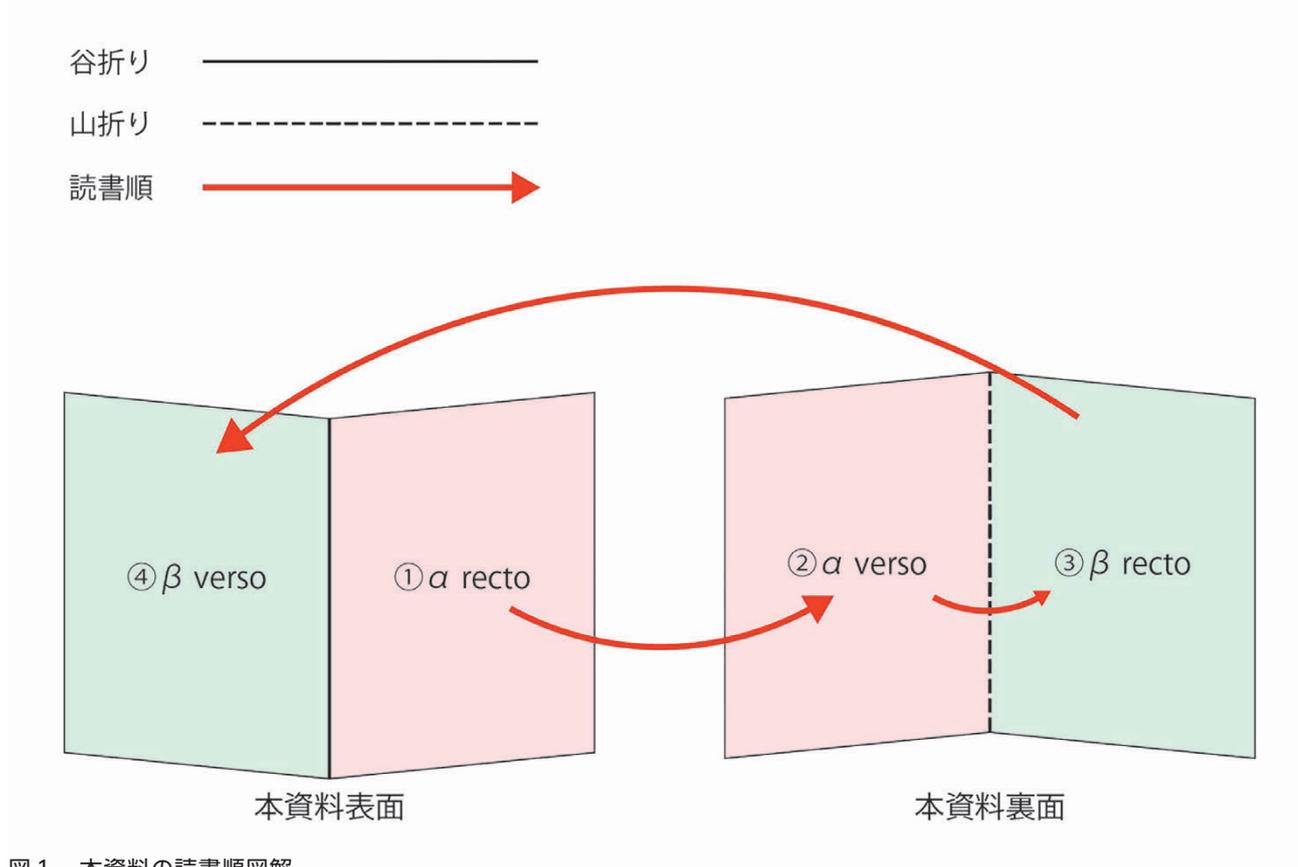


図1 本資料の読書順図解

表1 本資料の内容

行数	内容
<i>a recto</i>	
<i>l. 1</i>	祈祷文 (Gelasianum No. 526) <sup>8</sup>
<i>l. 2-10</i>	ヘブライ人への手紙13章17～21節
<i>l. 11-16</i>	マルコによる福音書16章9～13節 (ceteris まで)
<i>l. 17-29</i>	マタイによる福音書28章8節 (exierunt から) ～15節
<i>a verso</i>	
<i>l. 1</i>	祈祷文 (Gelasianum No. 541) <sup>9</sup>
<i>l. 2-8</i>	ペテロの手紙第一 2章21節 (Christus から) ～25節
<i>l. 9-11</i>	アレルヤ唱 Alleluia. Surrexit pastor bonus
<i>l. 12-20</i>	ヨハネによる福音書10章11節～16節 (fiet まで)
<i>l. 21-27</i>	復活節主日ミサの奉納唱 Deus Deus meus ad te de luce vigilo
<i>l. 28</i>	祈祷文 (Gelasianum No. 543) <sup>10</sup>
<i>l. 29</i>	復活節主日ミサのアレルヤ唱 Alleluia. Ego sum pastor bonus (meas et まで)
<i>β recto</i>	
<i>l. 1-10</i>	ペテロの手紙第一 1章18節 (redempti から) ～25節 (domini まで)
<i>l. 11</i>	ルカによる福音書24章1節 (sabbati まで) ／ペテロの手紙第一 1章25節 (上段の続き。manet から aeternum まで)
<i>l. 12-27</i>	ルカによる福音書24章1節 (上段の続き。valde から) ～12節
<i>l. 28-29</i>	マタイによる福音書9章14節 (accesserunt から ieu[nabunt] まで)
<i>β verso</i>	
<i>l. 1-3</i>	マタイによる福音書9章16節 ([vesti]m[en]to から) ～17節 ( <i>β recto</i> の <i>l. 28-29</i> の続き?)
<i>l. 4-6</i>	復活節主日ミサの入祭唱 Iubilare deo
<i>l. 7-9</i>	祈祷文 (Gelasianum No. 546) <sup>11</sup>
<i>l. 10</i>	ペトロの手紙一 2章11節 ([o]bsecro から advenas まで) ／祈祷文 (続き。[sec]tari から) (Gelasianum No. 546) <sup>12</sup>
<i>l. 11-22</i>	ペトロの手紙一 2章11節 ([et] peregrinos から) ～19節 (christo まで)
<i>l. 23-25</i>	ペトロの手紙一 2章19節 (Jesu domino nostro まで) ／アレルヤ唱 Alleluia. Surrexit altissimus
<i>l. 26-29</i>	ヨハネによる福音書16章16節～7節 (quia まで)

を明確にする改変が施されている。これも「文脈から切り離された聖書本文の理解に必要な場合に」「若干のことばを削除するか補う」ために行われる伝統的な措置であり、朗読聖書の特徴を示す手法であって<sup>14</sup>、本資料がミサ典礼の実用のために制作されたであろうことはここからも十分に推察される。

### 3. 本資料収載の聖歌

本資料には以下の5つの聖歌が収載されている。

#### ① *a verso l. 9-11*

「Alleluia. Surrexit pastor bonus アレルヤ 善き牧

者は復活した」(Cantus ID: g02080)<sup>15</sup>

ヨハネ福音書10章11節を詩節とするアレルヤ唱である。復活節主日ミサのアレルヤ唱として歌われるケースもある。

#### ② *a verso l. 21-27*

「Deus Deus meus ad te de luce vigilo 神よ、私の神よ、暁からあなたを待ち望み」(Cantus ID: g01056, g01056a, g01056b)

詩編63 [62] 編2節～8節から選択され組み合わせられたテキストをもつ復活節主日ミサの奉納唱である。一般には復活節第2主日に歌われる傾向がある。本資料では交唱部(2節 a、5節 b)のほか詩句

(versus) も 2 節記載されている (2 節 b + 3 節 b、7 節 b + 8 節)。

③ *a verso l. 29*

「Ego sum pastor bonus 私は良い牧者である」  
(Cantus ID: g01057)

ヨハネ福音書10章14節をテキストとする復活節主日ミサの拝領唱の交唱部である。一般には復活節第2主日に歌われる傾向がある。

④ *β verso l. 4-6*

「Iubilate deo omnis terra 全地よ神を喜びたたえよ」  
(Cantus ID: g01058)

詩編66 [65] 編 1 節と 2 節 a をテキストとする復活節主日ミサの入祭唱である。一般には復活節第2主日もしくは第3主日に歌われる傾向がある。

⑤ *β verso l. 23-25*

「Alleluia. Surrexit altissimus アレルヤ いと高きお方は復活なさり」  
(Cantus ID: g02464)

マタイ福音書28章6節とガラテヤの信徒への手紙3章13節に着想を得たテキストをもつアレルヤ唱である。復活節主日ミサのアレルヤ唱として歌われるケースもある。

以上5つの聖歌テキストは、いずれも祈願文や朗読聖書部分などの他のテキスト行と比べ意図的に小さく書かれている(図2)。これは、他のテキスト行と同じ縦幅のなかに、聖歌テキストの上部にネウマ記号を付すためのスペース、つまり聖歌集でいうところの Campo aperto (空白部分) を確保するためである。聖歌テキストとネウマ記号とを他の行と同じ縦幅のなかに書き込むことによって、他のテキスト行との一体性を保持しようとしたとも考えられる。メリスマ旋律のゆえに聖歌テキストの単語もしくはは

音節を離れた位置に記さねばならない場合には、テキストの一体性を示すために、テキスト内の空白部を赤線で結ぶ工夫もなされている。

こうした記譜上の工夫からも、本資料は、祈願文、朗読聖書とともに聖歌をも記載する楽譜付きミサ典礼書(ミサ全書)の制作史の一段階を示す貴重な資料であるということができよう。

#### 4. 本資料の形態・レイアウト・書体の特徴

これまで、本資料収載のテキストの内容について紹介した。ここからは、本資料の形態やレイアウト、書体などの特徴について触れることにしよう。

まず、本資料の形態に注目したい。本資料中央にある縦の折り目には糸で綴じられていた痕跡があり、*β recto* の最後の内容と *β verso* の最初の内容が繋がっていることから(表1参照)、一枚の羊皮紙(詳細な動物種は不明)を二つ折りにした見開き2葉、計4ページが典礼書から抜き出されたものと考えられる。また、下部が直線状に裁断されていることや、上下左右の端に折り目があること、貫通した2つの穴の片方(右上の穴)に糸の切れ端が残着している部分(図3)や、糸が貫通していた痕跡と思われる穴(図4)があることから、後世になって印刷本の装丁に再利用されたいわゆる binding waste であると考えられる<sup>16</sup>。

八木健治『羊皮紙のすべて』によると、羊皮紙は耐久性に優れているため書籍用紙として衰退した後も、本の装丁用に重宝され、ブックカバーとしての役割を担ったという<sup>17</sup>。羊皮紙で写本冊子が作られていた時代の装丁は、羊皮紙の波打ちを抑える必要

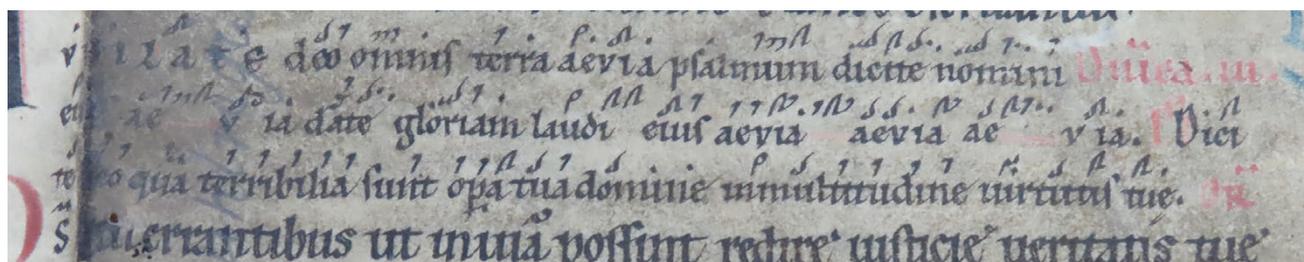


図2 *β verso l.4-6 Iubilate deo*

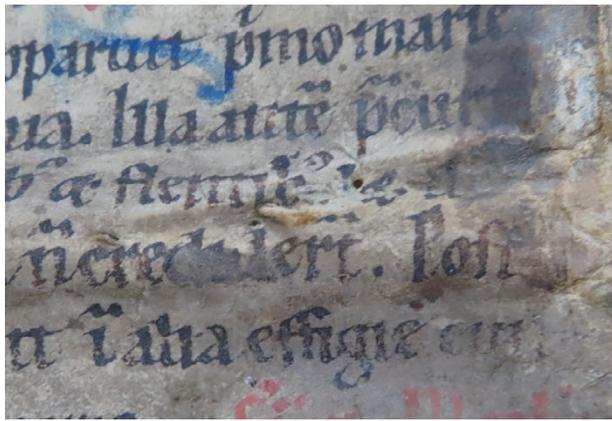


図3 貫通した糸が穴に残着している部分の拡大図



図4 糸が貫通していた跡と思われる穴

があったため、木材にレザーを貼って作る重厚なものが主流であったが、紙の本が一般的になると加工しやすい厚紙の上に羊皮紙を貼って作るようになった。この羊皮紙と厚紙でできた装丁は羊皮紙が湿度変化の影響を受けて収縮することにより、全体が湾曲してしまうという問題があり、羊皮紙の裏側に紙を貼り付け裏打ちすることで繊維の膨張や伸縮を抑制する工夫がなされていたという<sup>18</sup>。また、上記のものより簡易的な製本形態として、芯のない羊皮紙の四辺を折りたたんだカバーに紙の冊子本体を挿入し、本体のヒモを羊皮紙に通して固定する「リンブヴェラム装」と呼ばれる技術があるという<sup>19</sup>。

本資料の装丁はどのようなものであったろうか？ *a recto* の表面を見てみると、*a verso* のそれよりも全体的に色が黒ずんでおり、中央や左下には何かを貼って剥がしたような跡がある。それ以外にも染みやかすれで文字が識別しにくくなっている部分が

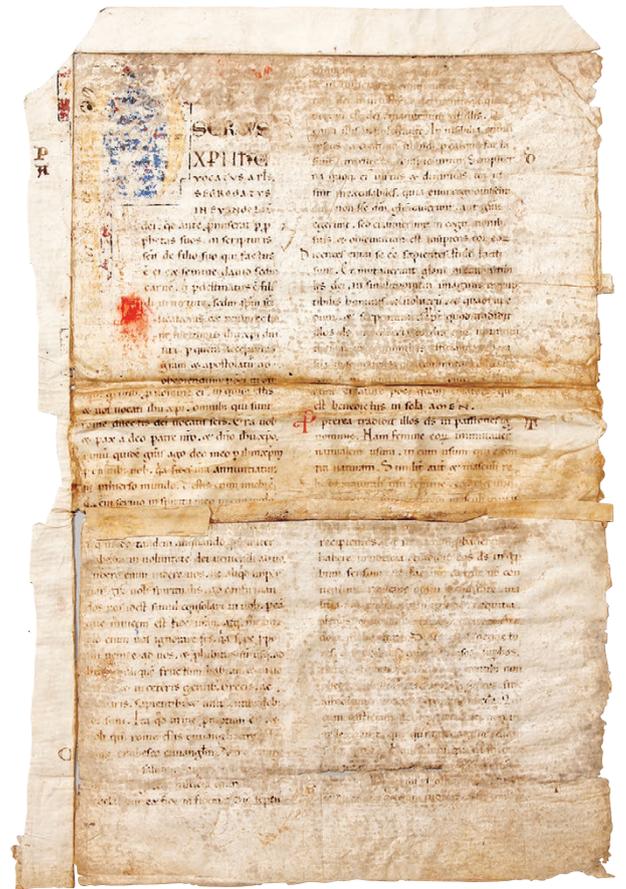


図5 12世紀ラテン語聖書写本「ローマの信徒への手紙」西南学院大学博物館 C-b-113

*a verso* よりも多くみられる。しかし、大半の文字が識別できる程度には残っているため、裏打ちされていた紙を剥離して今の状態にしたとは考えにくい。また、前述のとおり、本資料には短い糸が貫通している箇所や、これと同じ太さの糸を貫通させた跡のような穴が散見されることから、本資料が実際に装丁として再利用されていたとすれば、本資料は、リンブヴェラム装のように、何らかの冊子本体と直接糸で縫合されていた可能性が高いのではないだろうか。

一方、本資料には、装丁用に用いられていたことに疑念を抱かせる特徴もいくつか見られる。

たとえば、本資料と同じく *binding waste* だと考えられている「西南学院大学博物館所蔵12世紀ラテン語聖書写本『ローマの信徒への手紙』」（資料番号：C-b-113、以下資料 A）（図5）と比較してみると、資料 A の中央には、装丁していた本の背表紙があっ

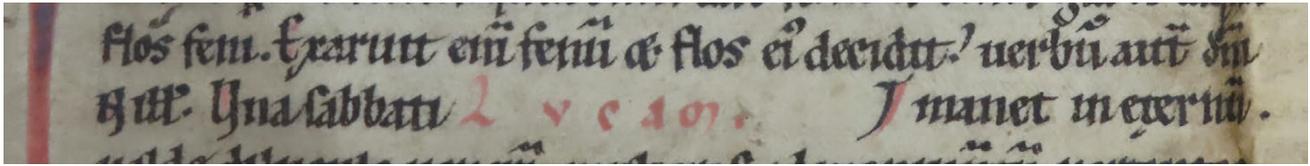


図6(上) 上段から2行目、赤のインクでハイライトされた「J」のような形の記号を用いて1行目の末尾に入りきらなかった manet in aeternum を挿入している (β recto, l. 9-11)。

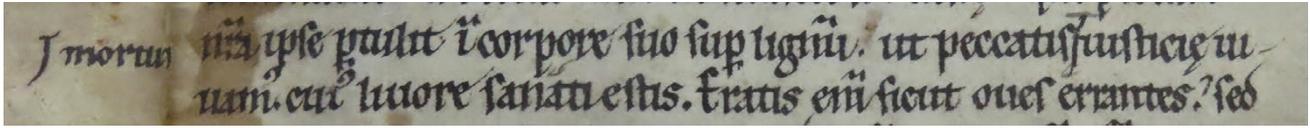


図7(下) 左端と上段文中の右にそれぞれ「J」に似た形の記号を用いて、入りきらなかった、あるいは脱字した mortui を挿入している。左欄外の記号は挿入すべき文字を、文中の記号は挿入すべき箇所がそれぞれ示唆されている (α verso, l. 6-7)。

た部分と考えられる2本の深い折り皺が刻まれているが<sup>20</sup>、本資料にはそのような痕跡は見受けられない。

また、本資料中央の縦の折り目のちょうど中央の水平の位置に横に折り目がついている。この横の折り目は、縦の折り目も合わせると、本資料をちょうど四つ折りにできるような位置についている。この水平の折り目が、本資料が装丁として再利用されるにあたってつけた折り目なのか、それとも別の時期に付けられた折り目なのかは不明である。いずれにせよ、本資料が実際に binding waste であるならば、一体どのような形で冊子本体をカバーしていたのかは自明ではなく、考察の余地が残る。

次に、本資料のレイアウトの特徴についても言及しておこう。本資料は全てのページが一欄(一段)の長行で構成されている。各行の頭文字は左にそろえられ、行自体の幅も、多少のばらつきはあるもののおおむねそろっている。どのページも29行を数えたところで裁断され、切り取られているため、行間もある程度そろっていることが分かる。これらの特徴は偶然ではないだろう。一行には収まりきらないが、直後に in illo tempore など重要な区切りを示す単語が来るために改行もできない文字は、記号を用いて次段の末尾に送る(図6)、または欄外に書き足す(図7)などの工夫が各ページに見られる。このため、すべてのページのレイアウトは意図的に統一されていると推察できる。

バルンハルト・ビショッフ『西洋写本学』によると、一般に折丁の構成を決める際、料紙には書作業の規格を示す線を引が引かれ、テキストの両端と文の行間を画定するための孔が開けられたという<sup>21</sup>。肉眼で見る限り、本資料にはこのような線や孔の直接的な痕跡は見受けられないが、各行の頭文字や幅、行間がそろっているという点で、上記の工程を経ていると考えられる。

最後に、本資料の書体の特徴についても付言しておこう。先に結論を述べるならば、本資料に記されたアルファベットはカロリング小文字体からゴシック体への移行期の写本に見られるプロトゴシック体であると考えられる。その根拠としては、aがカロリング小文字体よりも垂直で少し角ばっていることや、mやnの縦線がしっかりしていることなどが挙げられる<sup>22</sup>(図9)。

資料A(前出)も過去の資料紹介ではプロトゴシック体に分類されている<sup>23</sup>。同資料紹介によると、ゴシック体はカロリング小文字体から徐々に変化して生まれた書体であるため、この二書体の境目を明確に画定することは困難であり、この二書体双方の特徴を備えた「あわい」書体こそ、古書体学や写本学において「プロトゴシック体」と呼びならわされている書体なのだという<sup>24</sup>。

たしかに、資料Aと本資料の a, m, n の字形を比較してみると、資料Aの字形が全体的に丸みを帯びているのに対し(図8)、本資料の字形は縦の線



図8 資料Aの a, m, nの拡大図



図9 本資料の a, m, nの拡大図

がより垂直で、曲線部が角ばっており（図9）、よりゴシック体に近いということが分かる。一口に「プロトゴシック体」と言っても、このようにカロリング小文字体とゴシック体のどちらに特徴が寄るかで印象が大きく変わるのは、双方の特徴を併せ持った「あわい」書体であるプロトゴシック体ならではの興味深い特徴と言えよう。

## おわりに

本稿では、西南学院大学博物館所蔵の「楽譜付きミサ典書断片」について、その概要を、本資料の内容に関わる「典礼暦」や「復活節」など典礼学上の鍵語とともに紹介した。本稿はあくまで本資料の予備調査の結果であり、未だ不明な部分も多い。

例えば、本資料表面には「1539」「H25.」のように青インクで記された文字がある。これらがいつ、何のために記されたものなのかについては解が見出せていない。また、本資料は再利用される際に下部が裁断されているため、完本であった時の大きさも不明である。

加えて、記載されている祈願文、聖書朗読箇所、聖歌が、50日間にわたり続く復活節のどの典礼日（主日、もしくは週日、もしくは祝祭日）に用いられたのかについても確言はできない。これらの典礼文にどのような典礼史的かつ典礼神学的な特徴が見出されるかも今後の課題である。本資料と同時代同地域のミサ典書写本をはじめ、聖歌写本、朗読聖

書写本など、他の典礼書写本との比較検討を行う必要がある。さらには同時代の典礼学者の見解、わけでも彼らのミサ解説からの示唆も、こうした課題の解明の助けになると考えられる。

このように、本資料の研究にはいくつもの未着手の課題が残っていることを指摘して本稿を結びたい。本資料については引き続き調査・研究を継続してゆく必要がある。

## 註

- 1 『岩波 キリスト教辞典』 2002 p. 1081-1082. なお、西南学院大学博物館の所蔵データでは「ミサ典書」となっているが、本稿では「missale」を、『岩波 キリスト教辞典』のほか『新カトリック大事典』（第4巻 2009 p. 882-883）にも従って「ミサ典礼書」と表記する。
- 2 C. Vogel, *Medieval Liturgy. An Introduction to the Sources* (revised and translated by W. G. Storey and N. K. Rasmussen), Washington D. C. 1986, pp. 105-106; E. Palazzo, *A History of Liturgical Books from the Beginning to the Thirteenth Century*, Minnesota 1998, pp. 107-110.
- 3 下園・勝野 2022 p. 8.
- 4 2023年度西南学院大学博物館テーマ展示「楽譜とことば一祈りの歌のカケラたち」 会場：西南学院大学博物館1階廊下、会期：2023年12月20日(水)～2024年4月4日(木)
- 5 2025年度 西南学院大学博物館×國學院大學博物館相互貸借特集展示Ⅱ「祈りの歌の泉をたずねてーグレゴリオ聖歌のあゆみ」 会場：國學院大學博物館（東京都渋谷区）、会期：2025年10月4日(土)～2026年1月25日(日)
- 6 K.-H. ビーリッツ 2003 p. 103-104.
- 7 同書 p. 104-110.
- 8 Mohlberg, *Liber Sacramentorum Romanae Aeclesiae Ordinis Anni Circuli*, Roma 1960, p. 84, l. 7-8.
- 9 Mohlberg, p. 85, l. 13-15.
- 10 *Ibid.*, l. 19-20.
- 11 *Ibid.*, l. 30-32.
- 12 *Ibid.*, l. 32.
- 13 *Biblia Sacra* 2007.
- 14 『朗読聖書の緒言』第124項 2005 p. 58. (= Cf. *Missale Romanum* [et. al.] *Lectionarium I. De Tempore: ab Adventu ad Pentecosten*. Editio Typica, Vaticano 1970, p. 22.)
- 15 Cantus ID は、カナダのダルハウジー大学の Jennifer Bain 教授が率いるプロジェクト「Cantus Index」(<https://cantusindex.org>)によって付与された聖歌の認識番号である。同プロジェクトは「Cantus Database」(<https://cantusdatabase.org>)をはじめとするさまざまな単旋律聖歌のデータベースの国際ネットワークの中核機能を果たしている。「Cantus Database」では、どの聖歌がどの典礼日で歌われるべく聖歌写本に記載されているかを調べることができるため、使用される典礼日の一般的傾向を知ることが可能である。
- 16 下園・勝野 2022 p. 8.
- 17 八木 2021 p. 86.

<sup>18</sup> 同書 p. 375.

<sup>19</sup> 同書 p. 376.

<sup>20</sup> 下園 2022 p. 61.

<sup>21</sup> ビショッフ 2015 p. 27.

<sup>22</sup> 西脇・栗田 2023.

<sup>23</sup> 「プロトゴシック体の特徴の発現がまだ明確ではないとして、プロトゴシック体に近いという注意書き付きの『後期カロリング小文字体』として規定することもできる。」との注が付けられていた。下園 2022 p. 65、69.

<sup>24</sup> 同上、p. 65.

#### 参考文献

Mohlberg, *Liber Sacramentorum Romanae Aeclesiae Ordinis Anni Circuli*, Roma 1960.

C. Vogel, *Medieval Liturgy. An Introduction to the Sources* (revised and translated by W. G. Storey and N. K. Rasmussen), Washington D.C. 1986.

E. Palazzo, *A History of Liturgical Books from the Beginning*

*to the Thirteenth Century*, Minnesota 1998.

大貫隆・名取四郎・宮本久雄・百瀬文晃 編『岩波 キリスト教辞典』岩波書店 2002年

日本カトリック典礼委員会編『朗読聖書の緒言』（改訂版）カトリック中央協議会 2005年

K.H. ビーリッツ著、松山與志雄訳『教会暦 祝祭日の歴史と現在』2003年

*Biblia Sacra iuxta vulgatam versionem*. Robert Weber, Roger Gryson (eds.) (5 ed.). Stuttgart 2007.

下園知弥・勝野みずほ『西南学院大学博物館研究叢書 印刷文化の黎明 インキュナブラからキリシタン版まで』花乱社 2022年

八木健治『羊皮紙のすべて』青土社 2021年

下園知弥「西南学院大学博物館所蔵「12世紀ラテン語聖書写本『ローマ信徒への手紙』」」『西南学院大学博物館研究紀要 第10号』2022年 59-69頁

西脇純・栗田りな「楽譜付きミサ典書写本断片（所蔵品紹介）」『西南学院大学博物館ニュース Vol.49』2023年

西脇 純（にしわき じゅん）

栗田 りな（くりた りな）

国際文化学部教授

西南学院大学博物館学芸調査員

---

---

# 西南学院大学博物館研究紀要

第 14 号

---

発行日 2026(令和8)年3月19日

発行 西南学院大学博物館  
〒814-8511 福岡市早良区西新6-2-92

発行 福岡印刷株式会社  
〒810-0001 福岡市中央区天神3丁目4番3号

---

---